

キリスト教の呪術性と日本のスピリチュアリズム —現代キリスト教の神秘体験と日本の心霊現象—

中 里 巧

1. 既存既成の宗教の被呪縛性

既存既成の宗教は、教義の呪縛に捕らわれるあまり、本来の宗教性や霊性とはかけ離れるばかりか、むしろ逆に、自らの宗教性や霊性を枯渇させたり絞殺させたりすることがありはしないだろうか。そもそも、宗教とは何だろうか。或いは、宗教と呼ばれるものは、一体何を意味し、何を指示する言葉なのだろうか。少なくとも本来、第一義としては、人の集まりとしての組織体や教団を指示してはいない、と私は思う。第一義というのは、宗教はその起源を先史時代にまで遡及しうるのみならず、人類の発生の起源にまで遡及すべきものであるということである。宗教の起源や端緒ないし発生は、高度に組織化され法制化された都市国家・因習的な掟に縛られた村落共同体の成立以前にまで遡及しうるものであり、ごく少数の成員からなる狩猟採集をとおして主な糧を得る移動集団において、宗教の発生を見出すか、ないしは、そうした移動集団の成員のなかで、因習や伝承とは明らかに異質な位相において、突発的・個別的に、或る特定の個人のうちに宗教的霊性の発生を見出すべきものである、と私は考えている。狩猟採集段階の移動集団が有していた宗教的霊性を、広義の呪術と呼ぶならば、呪術をつかさどる者は呪術師であるが、呪術師は、たんなる因習や伝承のみによっては生じず、もっと異質な位相における宗教的霊性、言い換えれば、霊媒などの特殊な能力が必要とされる。私は現代においても、宗教と呼称されるものが成立しているかぎり、呪術性が何らかの仕方で宗教の基層に潜み続けている、と思う。過去においても現在においても、さらに、将来においても、呪術性が宗教の基層において如何なる仕方や形であれ存在することは、宗教における必須な要件であり、こうした呪術性は、時代・人種・言語・文化・地域の制約を超えて、本質的にその内実は一応して抜本的な変化はない、と私は考えるのである。換言すれば私は、宗教はなべて、その度合いや程度の如何、自覚があるかないか、表層に現れているか深層に隠されているかにかかわらず、何らかの仕方でつねに、呪術性を帯びている、と考えるのである¹。

1 例えば、アンナ＝カタリナ＝エンメリック Anna Katharina Emmerick (1774-1824) は、農家の生まれで、幼少期から聖母マリアや守護天使を幻視して、親しく接することができた。1798年には頭部に桂冠の聖痕を受けている。1802年聖アウグスティヌス修道院に入る頃から、病者を治癒する力をもつことが知られるようになった。修道院閉鎖後、病弱であったエンメリックは、四肢や脇腹に聖痕を受けるようになった。1819年以降、ドイツの詩人クレメンス＝マリア＝ブレンターノ Clemens Maria Brentano (1778-1842) は、エンメリックを度々訪れ、エンメリックによる膨大な数の幻視を、エンメリックから聞き取り口述筆

2. 呪術性

しかし、今日では宗教と云えば、人々の集まりとしての組織体やその活動および教義や教義に付随する実践活動等を主に、意味する、と広く了解されているのではないだろうか。

今日の宗教組織体や教義および教義に付随する実践活動はみな、合理性によって貫徹されている。そしてその合理性は、精神的－宗教的位相に根差しているというよりも、心理的－社会的位相に根ざした合理性であるように思われる。すなわち、今日の宗教は概して、精神的－宗教的位相とは異なる位相に根差した合理性に呪縛されているであろう。今日広く社会に承認されている宗教は、心理的－社会的位相といういわば常識の体系に内包され捕縛されていると云ってよいだろう。

けれども、本来の宗教性は呪術的なものであり、善悪の混沌という不合理性²や狂気³を

記して、エンメリックの幻視日記として出版した。この日記は、新旧約聖書の人物や出来事の歴史的に補完する内容で満ちており、その記述は精細を極めていいる。例えば、以下のテキストを参照： *The Life of the Blessed Virgin Mary, from the Visions of Anne Catherine Emmerich*, translated by Sir Michael Palairat, with supplementary notes by Rev. Sebastian Bullouch o.p., Tan Books, an Imprint of saint Menedit Press, Charlotte, North Carolina, 2013. 宗教性は本来、自覚の程度の差はあるにせよ、こうした幻視や予言などと併存する人間精神の自由な働きであり、後付けされる教義を支えたり補強したりすることはあっても、教義に拘束されるものではないだろう。

2 怪奇小説のうち、加門七海の作品には、善と悪の混沌や融合ないし未分化などの局面がしばしば描かれている。加門は、そうした局面の霊性を「鬼」として形象化することが多い。例えば、以下のテキスト参照：『蠱』集英社文庫、集英社、1999年；『丸調伏令』上下巻、朝日ソノラマ、2000年；『完全版 晴明』朝日ソノラマ、2000年；『大江山幻鬼行』祥伝社文庫、祥伝社、2000年、『祝山』光文社文庫、光文社、2007年。おそらく加門七海にとって、社会的－心理的位相に属する善悪という枠組みは、それほどリアリティや説得力をもっていないのだろう。加門にとって善と悪は固定したものでも確定したものでもないだろう。ひょっとすると加門は、神の不変性や唯一性について徹頭徹尾疑っているのではないだろうか。加門は、著作のなかでしばしば「鬼」の語源を「隠ぬ」と語って、(1) 善悪が明瞭ではない、(2) 善悪未分、(3) 善悪が自在に変転するのが、鬼という存在である、と述べている。平安中期の漢和辞書十卷本『和名類聚抄』には、「或説に云ふ於邇は隠者の訛なり。鬼物は隠れて形を顕すことを欲せざるの故を以ての称なり」とあり、「鬼」の字義（『新漢語林』第二版）と同様に、本来、死者の霊を指示していた。「鬼」は隠者の発音が変化した言葉であり、本来、死者の霊を意味した。死者の霊は、隠れることを欲するゆえに、隠者であり鬼なのである。加門は、鬼のこうした隠れる性質を独自に解釈して、善悪という倫理的本質さえ隠しているのが鬼であると、と理解しているのである。前田富祺監修『日本語源大辞典』（小学館、2005年）のうち、「鬼」の項目の語源説①として、「隠」の字音から転じた語<和名抄>。オニは古語ではなく、古くは、神でも人でもない怪しいものをモノといい、これに適合する漢字はなかった。モノは常に人目に見えず隠れているということから、オン（隠）の字音を用いるようになり、オニと転じた<東亜古俗考＝藤原相之助>という記述がある。これとはほぼ同じ説が、小松寿雄・鈴木英夫編『新明解語源辞典』（三省堂、2011年）の「鬼」の項目にも掲載されている。さらに、『日本語源大辞典』の「物」の項目の語源説⑤に、「精霊、神、魔の義<日本神話の研究＝松本信広・上代貴族生活の展開＝折口信夫>」とあり、例として、「物の怪」という言葉が挙がっている（『日本語源大辞典』、増井金典著『増補版日本語源大辞典』（ミネルヴァ書房、2012年））。また、『旺文社古語辞典』第十版の「もの／物」名詞の項目①には、「物事。何か。言葉では言い表せない対象をさす」とあり、「もの」接頭辞の項目には、「はっきり言い表せない意を表す。何がさせるのか。なんとなく……」とある。以上、加門七海が関心を寄せる「鬼」は、言葉の起源をたどると、物の怪という言葉で一般的な「モノ」に行き着く。「モノ」は、言葉の指示する対象としてのそれが確実にはっきりとは言明できないため、事物一般として抽象化されてしまうのである。それは、その実体の本質が何であるかを隠蔽して名乗らず、その形象も明らかにならない。こうした「モノ」の特性の了解しやすい典型的事例として、古代から現代にいたるまで、死者の霊などが該当してきたのであった。「鬼」は、こうした「モノ」の自己隠蔽性を表す「隠ぬ」に当て嵌めた漢字が、字義として死霊を示していた「鬼」という漢字であり、この漢字の発音として、「おんぬ／おぬ」を適用させて、「鬼／おに」という言葉が定着した。鬼は死霊であり、同時に、それが誰であり何であるのか、その形象がどんなものなのか、自己を隠蔽する不気味な存在であり、恐怖を伴う。こうした鬼は、いつしか悪鬼として了解され、この了解が定着した。加門七海は、しばしば著作のなかで、物の怪の存在を知覚することができると語り、それらに魅了され引きつけられると同時に、それらに近寄り強固に闘ったりしてはならない怖い存在である、と述べている。加門にとって物の怪は、魅惑と恐怖という両義的存在であり、そうした両義性を帯びるがゆえに、加門は物の怪の象徴としての「鬼」に対する関心を失うことがない。加門は、物の怪や鬼に、人生における納得しがたい苦悩とともに、善悪いずれでもありうる生命の躍動を看取しているのである。現代社会において加門は、自己隠蔽性をもつ「鬼」に関心を持ち続けているのであるが、これはむしろ例外であって、現代の大半の人々は、自分の周囲の様々な具体的事物を、それらが容易に名称化も形象化も可能であるにも関わらず、一括してモノ化してしまい、それらの実体や本質に対して関心を寄せず、それらの内実を問わず、また、知覚しようともせず、抽象化して、日常性や世界観や作り上げている。現代の大半の人々は、この営みを、ほぼ無自覚におこなっている。こうして彼らは無自覚に、自分の日常の世界のなかに、自ら進んで、物の怪や鬼を作り上げている、と云うことができよう。

3 イスラエルによるエリコ殲滅は、ヘブル語でヘレム herem と呼ばれ、セプタギント（七十人ギリシア語訳聖書）では $\alpha\upsilon\theta\epsilon\mu$ /anathema と呼ばれる。ヨシヤはエリコ殲滅に言いつて、ヘレム（聖絶）を宣言して云う。「この町と、その中のすべてのものは、主への奉納物として滅ばされなければならない」（口語訳聖書ヨシヤ記6:17）、「あなたがたは、奉納物に手を

含んでいるゆえに、ときに、心理的－社会的位相を揺さぶったり、突き破ったりする。

私が「呪術」と呼称しているものを、シャーマニズム shamanism やアニミズム animism と呼び代えることもできるだろう。日本の有意味性体系（文化）に深く浸透している「呪術」という言葉の意味は、例えば、英語 incantation/enchantment/magic/black magic/occultism/necromancy/spell/sorcery/witchery/wizardry など、キリスト教文化圏（既存既成のキリスト教界が心理的－社会的位相に根を張り占有して、精神的－宗教的意味位相に多大な影響を与えて、制御している地域）の言語によっては、誤解を招き、そもそも表現不能である。私が「呪術」ないしは「呪術性」という言葉を以て、指示しようとしている意味は、(1) 宗教的感覚のリアリティ、(2) 作用性や操作性、(3) 精神的－宗教的位相の効果、(4) 想念の現実化、(5) 言葉や音声の力動性、(6) 時空の超越、(7) 地下・地上・天上などの複合的世界観などである。これらの特性が、生理的－身体的意味位相や心理的－社会的意味位相において、突発的に出現するのが、「呪術」や「呪術性」なのである。

精神的－宗教的位相と社会的－心理的位相が異なるのに対応して、宗教や宗教性は、倫理や道徳や人倫とは異なるのであり、その鍵となっているのが、宗教が帯びている呪術性なのであり、不条理や狂気なのである。

3. オウム真理教の殺人教義

仏教諸派は、オウム真理教の犯した凶悪な犯罪について、今なお、教義学的に明快な批判を行い得たとは云えない⁴。なぜなら、オウム真理教は、タントラ＝ヴァジラヤーナ（秘

触れてはならない。奉納に当り、その奉納物をみずから取って、イスラエルの宿営を、滅ぼさるべきものとし、それを惱ますことのないためである」（口語訳聖書ヨシュア記 6:18）、「銀と金、青銅と鉄の器は、みな主に聖なる物であるから、主の倉に携え入れなければならない」（口語訳聖書ヨシュア記 6:19）。ヘーレム herem/aváθeμα は、たんなる虐殺とは異なる行為であり、神への絶対的服従による奉獻である。その絶対性は敵味方の区別を超えていて、服従心に少しでも揺るぎがあれば、味方もまた殲滅されるほど厳格なものであった。herem が孕んでいる残酷さは、神の唯一性や絶対性ならびに神聖さや至高性とおそらく不可分であり、キリスト教史の血生臭さの要因でもあろう。こうした残酷さは、心理的－社会的位相から見れば間違いなく、狂気であろう。

4 中島尚志著『オウムはなぜ消滅しないのか』、グッドブックス、2015年。

中島尚志は、地下鉄サリン事件実行犯であった林康男の国選弁護人であり、東京大学大学院印度哲学科を修了している。中島は、『オウムはなぜ消滅しないのか』のなかで、オウム真理教は、「タントラ＝ヴァジラヤーナ」（秘密真言金剛乘）と呼ばれる殺人を肯定するインド後期密教の教義を利用した、と指摘して次のように語っている。

「麻原が説法でよく使った言葉は「ヴァジラヤーナ（金剛経）」と「タントラ＝ヴァジラヤーナ」である。／この言葉は、インド後期密教（その正確な翻訳経典であるチベット密教）の代表的な経典の一つである『秘密集会タントラ』の根幹的な部分であって、麻原の言葉とインド後期密教の間に矛盾はない。／高野山金剛峯寺の四百十二世座主の松長有慶氏の著作『秘密タントラ和訳』には……殺生を生業とする人たち、好んで嘘をいう人たち、他人の財物に執着する人たち、常に愛欲に溺れる人たち、……これらの人たちは本当のところ、成就するのにふさわしい人たちである。／……秘密金剛によって、一切衆生を殺すべし。……[殺された] このような者たちは、かの阿闍の仏国土において仏子となるであろう。／……麻原が重視した教義の核心部分は、インド後期密教の代表的経典の一つを模倣し、それを現代版に焼き直したものだ」（142～144頁）。

そして、中島は、殺人を肯定する箇所を含んだインド後期密教経典『秘密集会タントラ』と殺人を容認する麻原彰影の「タントラ＝ヴァジラヤーナ」の両者は、煩惱を積極的に肯定している点が共通しているといひ（147頁）、次のように詳しく語る。

「密教経典の作者たちは、ブッダ＝ゴータマが自らの煩惱を完全に消滅させたとは述べていないことに注目した。そのポイントは、ブッダ＝ゴータマが煩惱を巧みにコントロールする方法の発見者であり、そのことによって、迷いの火を吹き消して安楽な状態で人生を渡った達人だったことを理解していた、ということだ。／つまり、目標は煩惱に捉えられ、日々を「むさぼり」「いかり」「おろかさ」に振り回される自分の中に実存している自我執を巧みに操る持続的な境地を自分の中に確立することにある。そのために「煩惱を肯定し、解放する方法によっても実現できるのではないか」というのが密教経典の作者たちの共通の視点であった。／他方、教団設立初期の頃の麻原は、「むさぼり」から離れることによって「解脱する」とし、これがブッダ＝ゴータマの残した解脱法であるとした（『生死を超える』）。この段階での麻原は原始経典というブッダ＝ゴータマの方法に忠実である。彼は、「私の体験を交えて、わかりやすく説明していこうと思う」とも述べているので、麻原自身に解脱体験があったことは認めてよい。／ところが、教団内部で殺人行為がおこなわれた頃から、「むさぼり」「いかり」「おろかさ」を積極的に取り入れた密教的思考方法を肯定し、解脱ができる方法として取り入れていく。例えば彼は、次のように説法している。／「修行に

密真言金剛乗) と呼ばれる殺人を肯定するインド後期密教の教義を利用したからである。麻原が利用したインド後期密教のうちインド後期密教經典『秘密集会タントラ』は、衆生の人々を救済して解脱させるために、彼らを殺害することを勧めている。『秘密集会タントラ』の背景には、解脱のために逆に煩惱を解放する発想がある。なぜなら、ゴードマ=ブッダの死後、弟子たちがどれほど解脱と悟りを求めて、煩惱を消滅させよう努力しても、煩惱が消滅することはなかったからである。そして、煩惱は生きていこうとする力と一体であるから、そもそも、煩惱を否定する道は困難だ、と後期密教は考えて、むしろ逆に、煩惱を解放することによって解脱と悟りにいたる道を考案したのであった。『オウムはなぜ消滅しないのか』(グッドブックス、2015年)の著者中島尚志は、ゴードマ=ブッダもまた煩惱を完全に滅却することはなかったと云い、ゴードマ=ブッダの道は、そのつどそのつど出離を深めて解脱を完遂させていくという、反復的深化による解脱の実存的生成であったと云う。また、中島は、ゴードマ=ブッダが死にいたるまで、解脱の実存的生成の途上にあつたのであって、その意味で、けっして最終解脱者ではなかった、と云う。麻原彰晃は最終解脱者と自称したが、これは明らかな誤りであり、最終解脱者として許されるのは、絶対的存在としての神のみである、と中島は云う。

オウム真理教の犯罪との観点から仏教諸派の問題点として明らかになるのは、生きてい

は三つの道がある……/第一は小乗、ヒナヤーナ的な修行……/第二は大乗、マナーヤーナ的な修行……/第三はタントラ=ヴァジラヤーナ、秘密金剛乘的な修行である。/この三つは下から順に激しくなっていく。正法・像法・末法の時代があるが、現代は末法時代である。この時代には、タントラ=ヴァジラヤーナの道を歩かなければ、真理の流布はできないと思わないか。(八九年四月二十五日) /ボサツの修行には、大乗ボサツとタントラ・ヴァジラヤーナのボサツの二種類あって、大乗のボサツは、自分にも良く他人にも良いことをなすが、タントラのボサツは、自分の悪行(殺人を含む)を積むことになるが、それが、他に對して利となるならば、それを最高の実践課題とする。(八九年四月二十七日) /この時、麻原は煩惱をコントロールする道と煩惱を解放する道を同時に混在させ、煩惱を解放する道を上位に置いたのである。『生死を超える』の初版が八六年十二月であるから、わずか二年四ヶ月で、まったく正反対の実践方法を同時に混在させたことは、麻原が、この時点で跳躍的な宗教体験を経たのか、あるいは殺人行為を容認するために自分の宗教体験と無関係に理論武装しようとしただけなのか。おそらく後者であろう(147~149頁)。

中島に依れば、殺人は生そのものの否定であるがゆえに、認めることができない。

「ここで後期密教經典(タントラ仏教)のうち、オウム真理教の教祖麻原と関連する部分に絞って触れておこう。それは性交を宗教的な形に儀式化したものである。/それは特定の祭日の夜、あるいは満月の夜に林の奥でおこなわれた。/儀式は八人の女性と一人の男性によって構成される。男はシヴァ神の一形態であるプハイラヴァ神と理解され、中央に座る。八人の女性が彼を取り囲む。男は八人の女性と順次、性交を平等におこなう。その意味はシヴァ神の明妃(みょうひ)のシャクティが、シヴァ神と再結合することと同義と解された。/この事例は多くの秘密經典から考え出された宗教的儀式の一つであって、ほかにも多様なケースが挙げられている。要は、このような儀式を通してブッダ・ゴードマが実現した解脱を、煩惱を解放する方向に向かいつつ、形のない宇宙と溶け合う状態を実現しようとしたのである。その運動が後期密教經典の『最勝樂タントラ』を生み、「ヘーヴァジュラタントラ」、「時輪タントラ」を生み出した。/……密教經典の作者たちは、煩惱を解放することによって、ブッダ・ゴードマが実現しようとした解脱をめざしたため、ブッダ・ゴードマが禁止した戒律をあえて否定した。/煩惱の解放という路線上で、性交については、解脱が実現できるかどうかは別として、儀式化は可能だったといえよう。しかし殺人は簡単に儀式化できなかったのではなからうか。/……私はオウム真理教の教義のうち、殺人を肯定する部分、後期インド密教のうち、殺人を容認する箇所は、いずれも誤りだと結論づけたい(155~157頁)。

中島に依れば、煩惱の解放のうち性交などは認めるにしても、殺人や盗みは生それ自体の否定やそれに準ずるがゆえに、認めることはできない。

「問題は、この時にブッダ・ゴードマの煩惱が完全に消滅しかのうかどうかである。ブッダが悟りに至った道筋を具体的に説明したのが「苦集滅道」(四諦)であるが、「滅」すなわち煩惱が完全に消滅したと思われる後に「道」があることから、私は、ブッダの煩惱は完全に消滅していないと考えている。少なくとも、ブッダ自身、完全に消滅したと思っていなかったと思われる。/……しかし、それは、私たちが考える内容とはやや異なる。瞑想の深まる過程で解脱が実現すると、その事実をはっきり認識しながら「さらに出離がある」、つまりさらなる解脱があると分かること。そして、その根拠を「不安のみがある状態(念が残ること、煩惱を示唆している)」としているからである(『チューランスニヤタ・スタ』南傳大藏經第十一卷下所収)。/呼吸と最小限の食事という煩惱をバネとして、さらなる新しい解脱、新しい目覚めの境地を歩み続けようとしたのである。ゴードマは悟りを開きブッダとなった後にも、オウム真理教の教祖麻原が自称したような意味での「最終解脱者」ではなかったのである(172~175頁)。

中島の議論の限界は、絶対神には悟りの完結性を認めているゆえに、絶対神には殺害の自由が容認されているということについては、否定できない点であろう。仏教においても、絶対神の狂気は、否定できない点であろう。

く力と煩惱の一体性ないしは不可分離性について、反省が不徹底であること、および、こうした反省の不徹底さが、慈悲に安易にすぎる方途を開いて、それがいずれ、最終解脱者として自らを絶対化していくことを麻原に容易にさせたことである。根源的生命力を希求するための解脱であり悟りであるはずなのであるが、その根源的生命力は、殺害をも是とする煩惱にも深く根を張っていて、この根を断ち切ることはできないのである。仏教における根源的生命力という概念は、精神的－宗教的意味位相と心理的－社会的意味位相の矛盾のうちに、成り立っているわけである。

では一体、神ならば、絶対が許されるのだろうか。

4. ヨブ

絶対かつ唯一なる神を信仰するのがキリスト教であり、そのキリスト教は隣人愛を標榜しつつ、しかし実際には、十字軍など、戦争を肯定する血塗られた歴史を刻んできたことは、否定できない（註3、ヨシュアが、エリコ殲滅にさいして宣言したヘーレム helem（聖絶）を、参照）。

その神は、例えば、正義が踏みにじられることに抗議するヨブの叫びに対して、人間はあたかも塵芥に過ぎないかのごとくふるまう⁵。ヨブにとって、神の掟は、心理的－社会的位相と精神的－宗教的位相を貫くものであり、神の掟においては二つの位相の関係は無矛盾であり、だからこそ、「正義」が成り立つはずであった。そして、この「正義」をヨブは忠実に遵守し、誠実に生きた。しかし突如、財産ばかりかヨブ自身の身体にまで災いが降りかかるにおよんで、二つの位相に亀裂と矛盾が生じて、正義は瓦解する。ヨブの眼前で神は、みずから神の掟を破るのである。しかし、こうしたことを非難するヨブに対して、神は不条理にも、謝罪を求めて、ヨブはそれにしたがう。これが、ヨブ記における神義論と呼ばれるものの姿である⁶。ヨブ記の神義論において、ヨブの苦しみの意義はまった

5 ヨブは云う、「神は強い力でわたしの着物をつかみ、上着の襟でわたしを締めつける。わたしを泥の中に投げ込み、わたしは塵や灰のようになった。あなたに向かって叫んでも、あなたはお答えにならない。わたしが立ち上がっても、あなたは顧みてくださらない。あなたはわたしに対して残酷になられ、あなたの手の力でわたしを責められる」（フランシスコ会訳聖書ヨブ記30：18～21）。

6 ヨブは、神が認める義人であったが、災害を司る神の使いサタン Satan の注進にしたがって神は、サタンをとおしてヨブに様々な災いが降りかかることを許す（フランシスコ会訳聖書ヨブ記1：6～2：7）。息子たちのため浄めの燔祭を行ったにもかかわらず（フランシスコ会訳ヨブ記1：5）、災いが降り、息子たちを含めた一切の財産を突然一挙にヨブは失うが、「……立ち上がり、マントを裂き、頭を剃り、地面にひれ伏して礼拝して、言った、「私は裸で母の胎を出た。裸で、底に帰ろう。主が与え、主がお取りになった。主の名は祝されますように」と祈り、なお神に対して不平を言わず、罪を犯さなかった。しかし、サタンをとおして新たな災いが降りかかり、ヨブの身体全身に悪性の腫れ物が生じると、ヨブははじめ、「わたしたちは神の手から善いものを受けるのだから、悪いものも受けるべきではないか」（フランシスコ会訳聖書ヨブ記2：10）と云っていたが、次第に自分の人生を呪いはじめ、「滅びよ、私が生まれた日。「男の子が胎に宿った」と言ったその夜も。その日は闇になれ。神も上からその日を顧みず、光もその日を照らすな。闇と暗黒がその日を奪い返し、黒雲がその上に留まり、昼間を暗くする日食も、それを脅かせよ」（フランシスコ会訳聖書ヨブ記3：3～5）と嘆く。そして、ヨブは、「全能者の矢がわたしに突き刺さり、わたしの魂はその毒を飲み、神の恐るべき軍勢が、わたしを攻撃している」（フランシスコ会訳聖書ヨブ記6：4）と絶叫して、神がヨブの敵に他ならないことを訴える。ヨブを慰めるためヨブのもとにやって来た友人たちは、神に抗弁するヨブを叱責して、神が義人に敵対するはずはなく、ヨブに降りかかったあらゆる災いはすべて、ヨブの犯した罪責に帰すると主張して、ヨブに対して罪を認めて、神に対して謝罪して悔い改めるように説得するが、ヨブは自分の潔白を譲らず、「わたしの息がわたしのうちにあるかぎり、神の息吹がわたしの鼻にあるかぎり、わたしの唇は決して不正を言わず、わたしの舌も偽りを語らない。……わたしは自分の正しさを固く守って、それを捨てない。一日たりとも、心に恥じるところが無い」（フランシスコ会訳聖書ヨブ記27：4、27：6）と言って、友人たちの助言には断じて応じない。ついに神は嵐のただなか、ヨブの絶叫に応じて、「何者か、無知な言葉をもってわたしの計らいを暗くする者は。……わたしは、お前に尋ねる。わたしに答えてみよ。わたしが大地の基を据え

く明らかにされていない⁷。神は、災害を司り人間に敵対するサタンを神の使いとして用い⁸、サタンの助言をも受け入れ、正義を瓦解させてまで、苦悩を義人ヨブに付与する。神は、サタンの助言を受け入れれば、ヨブが幾重にも苦しむことを知っている。神は、ヨブの外的（財産の崩壊）・内的（身体の崩壊・神の不条理に接して生じる心理的－精神的苦悩と崩壊・信仰の危機）苦悩を理解して、ヨブを憐れんでいる⁹。しかし同時に神は、ヨブ自身があかたも塵芥であり神にとって何の意味も価値もない存在であるかのように、冤罪者ヨブに対して、罪を認めて謝罪するまで、ヨブを苦しめ続ける。

5. ヨブの三人の友人とエリフ

ヨブ記のなかで、ヨブの友人三人（エリファズ・ビルダド・ツォファル）は、神が正義を破壊するはずがなく、ヨブの苦難はヨブに原因があると云って、ヨブを責め立てる¹⁰。

こうしたヨブの友人三人の言説は、信仰上の実存的深淵の存在を無視する教義学にも似ている。神は、これら三人の言説が根本的に間違いであり、ヨブに何ら過失があるわけではないことを知っているのだから、三人を裁き、ヨブが取り成して彼らのために燔祭を行うようにさせて、三人は穢れが清まり、ヨブもまた、苦難から回復して、以前にも増して繁栄する。

ヨブともヨブの三人の友人とも違う見解をもっていたのは、誰よりも若かったエリフである。「……エリフは怒りに燃えた。ヨブが自分を神よりも正しいと思い続けているので、

たとき、お前はどこにいたのか。知っているなら、わたしに答えてみよ。誰が、その広がりを選んだかを、お前は知っているのか」（フランシスコ会訳聖書ヨブ記 38:2～5）と語りかけ、ヨブの一切切の神に対する抗弁の無力さを明らかにしつつ、「さあ、勇士のように、腰に帯を締めよ」（フランシスコ会訳聖書ヨブ記 38:3）と言って、ヨブを励ます。さらに神はヨブに向かって、「全能者と言いつ争う者よ、引き下がるのか。神を責め立てる者よ、答えよ」（フランシスコ会訳聖書ヨブ記 40:2）。「お前はわたしの裁きを否定するのか。自分を無罪とするために、わたしを有罪と定めるのか」（フランシスコ会訳聖書ヨブ記 40:8）と語り、こうした神の言葉に対してヨブは応えて、「あなたは、どんなこともおできになりどんな計画でも実行できない方ではないことを、わたしは悟りました。……わたしは塵と灰の上に座り、わたしの言葉を忌み、悔い改めます」（フランシスコ会訳聖書ヨブ記 42:2、42:6）と言って、神に謝罪する。他方、ヨブの友人エリファズに対して神は、「わたしはお前とお前のふたりの友人に対して怒りに燃えている。お前たちは、わたしの僕ヨブのように正しいことを語らなかったからである。……わたしの僕ヨブのところへ行き、自分たちのために焼き尽くす献げ物をささげよ。わたしの僕ヨブがお前たちのために祈ってくれるであろう。わたしは彼の祈りを聞き入れる。お前たちは、わたしの僕ヨブのように、わたしについて正しいことを語らなかったが、お前たちの愚かさを罰しないことにしよう」（フランシスコ会訳聖書ヨブ記 42:7～8）と語り、神に抗弁するヨブに、神に対して悔い改めるように勧めたヨブの友人たちを罰して、自分たちのために燔祭をおこない、神への謝罪をヨブに取り成してもらうように言う。そして、「ヨブが友人たちのために祈ったとき、主はヨブを元の繁栄に戻し、その財産を以前の二倍にされた」（フランシスコ会訳聖書ヨブ記 42:10）。

7 フランシスコ会訳聖書のヨブ記解説は、次のように述べている。「内容が義人の苦しみにあることは、学者たちも一致して認めている。この苦しみの問題については古代オリエントの国々、特にエジプトとメソポタミアの文献にも見られる。それは苦しみの起源と、意義を問題とする。本書の著者は、ヨブを襲ったすべての災いは、人間の反対者であるサタンの業であるとする。問題はその意義である。イスラエルの民は何世紀にもわたって、善を行う者は幸福であり、悪を行う者は不幸であると信じていた。この応報は現世的な、地上的なものであった。著者は個人的、地上的報いの正しさに対して、強い疑念を抱いている。しかし、本書では神がヨブに現れ、語りかけるが、苦しみの意義は明らかにされない。それは神秘のまま留まる」（聖書－原文校訂による口語訳、フランシスコ会聖書研究所訳注－、サンパウロ、2013年のうち、1232頁）。

8 「ある日のことである。神の子たちが来て、主の前に立ったとき、サタンも彼らに混じってやって来た。そこで主がサタンに、「お前はどこから来たのか」と仰せになると、サタンは主に答えて言った、「地をさ迷い、方法を巡り歩いて参りました」（フランシスコ会訳聖書ヨブ記 1:6～7）。この「神の子」や「サタン」Satan について、フランシスコ改訳聖書には、次のような註が付されている。「神の子」という表現は、霊的存在である天使たちを指す（38:7、創6:2、4、詩29:1、89:7 [6]）。「サタン」には定冠詞がついているので、固有名詞ではなく普通名詞の「敵対者」の意である（代上21:1、ゼカ3:1）。この「サタン」は、神の子らの一人として、地上の人々を試みる任務を有し、神の国での会議で、試みの結果を報告する役目がある。後にサタンは悪の力を象徴するものとなり、神の敵対者となる（ルカ10:18、黙12:9、20:2）」（フランシスコ会訳聖書1235～1237頁）。

9 神はヨブを励まして、云う「さあ、勇士のように、腰に帯を締めよ」（フランシスコ会訳聖書ヨブ記 38:3、40:7）。

10 「しかし、義人の魂は神の手にあり、どんな責め苦も彼らに触れることはない」（フランシスコ会訳聖書知恵の書3:1）。

彼は怒りに燃えた。彼はまた、ヨブの三人の友人に対しても怒りを燃やした」(フランシスコ会訳聖書ヨブ記 32:2～3)。エリフは、神の沈黙¹¹について語り、ヨブには神が沈黙しているように思えようが、決してそうではないと語る、「エリフは神の沈黙について云う「神はある方法で語り、また、別の方法で語られますが、人はそれを悟りません」(フランシスコ会訳聖書ヨブ記 32:14)。そしてエリフは、人間の知恵をはるかに超えた神の崇高さや至高性を語る(フランシスコ会訳聖書ヨブ記 36:26～37:24)。しかし、それはあたかも、それに面して人間は、ただひたすら沈黙するしかないような神の崇高さや至高性なのである¹²。だから、神が嵐の中からヨブに語りかけて、「わたしは、お前に尋ねる。わたしに答えてみよ」(フランシスコ会訳聖書ヨブ記 38:3)と問い諫めたとき、ヨブは、「ああ、わたしは卑しい者です。どうして、あなたにお答えできましようか。わたしはただ手を口にあてるだけです」(フランシスコ会訳聖書 40:4)としか云えず、神の諫めに対してただただ聴従して、「わたしはあなたのことを耳にしていました。しかし、今や、この目であなたを見ています。それ故、わたしは塵と灰の上に座り、わたしの言葉を忌み、悔い改めます」(フランシスコ会訳聖書 42:6)と応えるほかなかった。

エリフは若かったので、人生を生き抜いて世間知にも神の戒めの何であるかにも長けていたヨブやヨブの三人の友人たちほど、実は神を知らないがゆえに、かえって、神の崇高さや至高性を讃えることができたのであろう。しかし、もしエリフにヨブと同じ苦難がもたらされれば、エリフもヨブと同じく、神に絶叫するであろうし、あるいは、ヨブほどにも苦難に耐えられないであろう。

ヨブの三人の友人たちは、ヨブに何らかの過失があるからこそ、苦難を受けているのだという考えであった。しかしこの考えそれ自体は、心理的-社会的意味位相と精神的-宗教的意味位相を貫く神の掟のなかに生きる人々にとっては、決して間違った見解ではない。こうした神の掟を人々に与えてそこに生きることを強いるその神が、神の掟を破壊する苦難を与えるということは、そもそも、人々にとって考えられないことであり、また、考えてはならないことなのであった。

6. ヨブの実存的苦悩

ヨブは、苦難の始まった当初、「わたしは裸で母の胎から出た。裸で、そこに帰ろう。主が与え、主がお取りになった。主の名は祝されますように」(フランシスコ会訳聖書ヨブ記 1:21)と云い、「これらすべてのことにおいても、ヨブは罪を犯さず、神に愚痴ひとつこぼさなかった」(フランシスコ会訳聖書 1:22)のであった。さらに、サタンが「主の前から出て行って、足の裏から頭のとっぺんまで、悪性の腫れ物でヨブを苦しめ」(フ

11 「神よ、沈黙を守らないでください。神よ、何も言わずに、黙っていないでください」(口語訳聖書詩編 83:1)。

12 「しかし、主はその聖なる宮にいます、全地はそのみ前に沈黙せよ」(口語訳聖書ハバク書 2:20)；「あなたは天からさばきを仰せられた。神が地のしえたげられた者を救うために、さばきに立たれたとき、地は恐れて、沈黙した」(口語訳聖書詩篇 76:8)。

ランススコ会訳聖書ヨブ記2:7)で、妻に侮蔑されて、「あなたはまだ自分の誠実さを固く守っているのですか。神を呪って死んだらよいでしょうに」(ランススコ会訳聖書ヨブ記2:9)と、口汚く吐き捨てられても、ヨブは、「お前は愚かな女どもが言うようなことを言う。私たちは神の手から善いものを受けるのだから、悪いものも受けるべきではないのか」(ランススコ会訳聖書ヨブ記2:10)と妻を叱り、「このようにすべてにおいて、ヨブはその唇をもって罪を犯さなかった」(ランススコ会訳聖書ヨブ記2:10)のであった。

「主が与え、主がお取りになる」・「神から善いものを受け、悪いものも受ける」と嘘偽りなく考えて素直に思い、日々の生活のなかで神の掟にしたがって信仰を続けること、これがヨブの誠実さであった。ヨブを罵った妻は、実のところ、どれほど神に対して誠実を尽くしても、神自身が掟を破っている現実を、ヨブに突きつけているのである。こうしてヨブは、神自身が掟を破っている現実を直視することから逃れられなくなる。妻は、ヨブに向かって「呪って死ね」と吐き捨てたのであるが、これはまさしく、ほかならぬ神が実は神ではなく、それまで信じて疑わなかった世界全体が、実は嘘偽りであり、これらはいとも容易に瓦解するものであり、実際に瓦解すれば、暗黒と苦悩以外に現実はなかったことが明々白々になったという、そういう絶望の叫びであり、阿鼻叫喚にほかならない。この後ヨブは、自分の生を呪い(ランススコ会訳聖書ヨブ記3:1)、死を望みながら(ランススコ会訳聖書ヨブ記3:11)、神がまるでサタンのように自分に敵対することの不条理や苦悩を、神や友人たちに訴え始める。ヨブは、暗黒と苦悩の絶望のただなかに投げ出されながらも、妻が吐き捨てて云ったようには自殺せず、死を希求はしても、なお絶望のなかを生き続ける。それは、不条理に対する絶叫を挙げ続けることだけが残された唯一の存在理由であるかのような、想像を絶するほど、苛烈な生き様である。

7. 神の狂気と憐れみの呪術性

ヨブ記の神義論は、もっぱら神の絶対性や至高性を高揚しているだけであって、ヨブの苦難の意義やサタンの存在理由など神義論の根幹は、明らかにされていない。言い換えれば、神の絶対性や至高性ないしは崇高さが如何に賞揚されようとも、人間が実存的深淵から解放されることはないのである。

神の絶対性は、キリスト教における秘教ないしは呪術性に属すと考えるべきではないだろうか。崇高性や至高性や絶対性を帯びる神は、人間にとってただひたすら畏怖すべき存在であり¹³、人間知性の理解を超えており¹⁴、狂気を伴っている。

13 「主を畏れることは知識の初め」(ランススコ会訳聖書箴言1:7)。

14 「わたしコヘレトはエルサレムでイスラエルの王であった。わたしは天の下で行われるすべてのことについて、知恵を用い探り究めようと志した。これはつらい務めであり、神が人の子に与えた労役である。わたしは日の下で行われたすべての業を見た。しかし、見よ、すべては空であり、風を追い求めるに等しい。／ねじ曲がったものをまっすぐにすることはできない。無いものを教えることはできない。／わたしは心の中で自分にこう言った、／「見よ、わたしは、わたしより先にエルサレムを治めたす

キリスト教正教神父 J. レールupp (Jean-Yves Leloup 1950-) は、キリスト教における公教と秘教の関係について、キリスト教信仰には、「歴史的-制度的-公会会の潮流」historical/institutional lineage と「思慮深く表立たず目立たない潮流」discreet lineage があり、イエスが弟子に教えた「主の祈り」が公教の原点であり、イエスがサマリアの女に語った「霊と真による祈り」(後の「イエスの祈り」)(新約聖書ヨハネによる福音書 4:1-26) が秘教の原点である、と述べている¹⁵。

狂気を伴い不合理でありながら、絶対性や至高性や崇高性を帯びる神は、畏怖と沈黙を以てして臨むに相応しい神なのであるが、同時にこの神は、憐れみを絶やさぬ神でもある。「神よ、慈しみによって、わたしを顧み、／豊かな憐れみによって、／わたしの咎を消し去って下さい。／悪に染まったわたしを洗い、罪に汚れたわたしを清めてください」(フランシスコ会訳聖書詩編 51:3)¹⁶、「悔いる霊こそ、この上ない犠牲。神よ、あなたはへりくだった悔いる心を、さげすまれません」(フランシスコ会訳聖書詩編 51:19)¹⁷。畏怖し沈黙して悔いて謝罪する人間に、神は憐れみを注ぐのである。この悔いと謝罪は、精神的-宗教的意味位相のなかでそのつど発生して、そのつど心理的-社会的意味位相に降り注ぐのである¹⁸。この悔いと謝罪は、もはや神の掟に反すると云った根拠や証拠にも

べての人々に勝って、大いなる者となり知恵を増し加えた。わたしの心は多くの知恵と知識を会得した。」わたしは知恵と知識、狂気と愚かさを知ろうと心がけた。しかし、それもまた、風を追い求めるに等しいと悟った。／知恵が多ければ悩みも多く、／知恵が増せば憂いも増す」(フランシスコ会訳聖書コヘレ 1:12~18)。

15 p. 12ff. in *Compassion and Meditation—the Spiritual Dynamic between Buddhism and Christianity-*, by Jean-Yves Leloup, translated by Joseph Rowe, Inner Traditions, Rochester, Vermont · Toronto, 2009 (French Edition, 2000) .

16 「神や爾の神よ、爾の大いなる憐れみに因りて我を憐れみ、爾が恵みの多きに因りて我の不法を抹けし給え。屢々我を我が不法より洗い、我を我が罪より清め給え」(聖詠第五十聖詠 3~4、日本正教会翻訳、再刊、1988年)。

17 「神に喜ばるる祭は痛悔の霊たましいなり、痛悔して謙遜なる心は、神よ、爾軽んじ給わず」日本正教会訳聖書聖詠第五十聖詠 19)。

18 「すなわちあなたの神、主が彼らをあなたに渡して、これを撃たせられる時は、あなたは彼らを全く滅ぼさなければならぬ。彼らとなんかの契約をもしてはならない。彼らに何のあわれみをも示してはならない」(口語訳聖書申命記 7:2)。「しかし神はあわれみに富まれるので、彼らの不義をゆるして滅ぼさず、しばしばその怒りをおさえて、その憤りをことごとくふり起されなかつた」(口語訳聖書詩編 78:38)。「主はあわれみに富み、めぐみふかく、怒ること遅く、いつくしみ豊かでいらせられる」(口語訳聖書詩編 103:8)。「主はそのくすしみわがを記念させられた。主は恵みふかく、あわれみに満ちていられる」(口語訳聖書詩編 111:4)。「光は正しい者のために暗黒の中にもあらわれる。主は恵み深く、あわれみに満ち、正しくいらせられる」(口語訳聖書詩編 112:4)。「もしあなたがたが主に立ち返るならば、あなたがたの兄弟および子供は、これを捕えていった者の前にあわれみを得て、この国に帰ることができるでしょう。あなたがたの神、主は恵みあり、あわれみある方であられるゆえ、あなたがたが彼に立ち返るならば、顔をあなたがたにそむけられることはありません」(口語訳聖書歴代志下 30:9)。「そこであなたは彼らを敵の手に渡して苦しめられましたが、彼らがその苦難の時にあなたに呼ばわったので、あなたは天からこれを聞かれ、大いなるあわれみをもって彼らに救う者を与え、敵の手から救わせられました」(口語訳聖書ネヘミヤ記 9:27)。「主のいつくしみは絶えることがなく、そのあわれみは尽きることがない」(口語訳聖書哀歌 3:22)。「わが神よ、耳を傾けて聞いてください。目を開いて、われわれの荒れたさまを見、み名をもってなえられる町をごらんください。われわれがあなたの前に祈をささげるのは、われわれの義によるのではなく、ただあなたの大いなるあわれみによるのです」(口語訳聖書ダニエル書 9:18)。「あなたがたは衣服ではなく、心を裂け」。あなたがたの神、主に帰れ。主は恵みあり、あわれみあり、怒ることがおそく、いつくしみが豊かで、災を思いかえされるからである」(口語訳聖書ヨエル書 2:13)。「主に祈って言った、「主よ、わたしがなお国におりました時、この事を申したではありませんか。それでこそわたしは、急いでタルジシにのがれようとしたのです。なぜなら、わたしはあなたが恵み深い神、あわれみあり、怒ることおそく、いつくしみ豊かで、災を思いかえされることを、知っていたからです」(口語訳聖書ヨナ書 4:2)。「主よ、わたしはあなたのことを聞きました。主よ、わたしはあなたのみわざを見て恐れます。この年のうちにこれを新たにし、この年のうちにこれを知らせてください。怒る時にもあわれみを思いおこしてください」(口語訳聖書ハバク書 3:2)。「[わたしが好むのは、あわれみであって、いけにえではない]とはどういう意味か、学んできなさい。わたしがきたのは、義人を招くためではなく、罪人を招くためである」(口語訳聖書マタイによる福音書 9:13)。「偽善な律法学者、パリサイ人たちよ。あなたがたは、わがわいである。はっか、いのんど、クミンなどの薬味の十分の一を宮に納めておりながら、律法の中でもっと重要な、公平とあわれみと忠実とを見のがしている。それもしなければならぬが、これも見のがしてはならない」(口語訳聖書マタイによる福音書 23:23)。「主は、あわれみをお忘れにならず、その僕イスラエルを助けてくださいました」(口語訳聖書ルカによる福音書 1:54)。「あわれみ深い人たちは、さいわいである、彼らはあわれみを受けるであろう」(口語訳聖書マタイによる福音書 5:7)。「神はモーセに言われた、「わたしは自分のあわれもうとする者をあわれみ、いつくしもうとする者を、いつくしむ」(口語訳聖書ローマ人への手紙 9:15)。「ゆえに、それは人間の意志や努力によるのではなく、ただ神のあわれみによるのである」(口語訳聖書ローマ人への手紙 9:16)。「異邦人もあわれみを受けて神をあがめるようになるためである、「それゆえ、わたしは、異邦人の中であなたにさんびをささげ、また、御名をほめ歌う」と書いてある

とづくものではない。人間存在そのものが、悔いと謝罪の根柢にほかならないのである。

8. 神の憐れみとサマリア人の二つのたとえ

神の憐れみという観念は聖書全体を貫いている、というのが私の考えである。そして新約聖書では、サマリア人の二つのたとえ（「サマリアの女との問答」（フランシスコ会訳聖書ヨハネによる福音書4：1～30）・「善いサマリア人」（フランシスコ会訳聖書ルカによる福音書10：25～37）が、既存既成の組織としての宗教や心理的－社会的意味位相に捕らわれない秘教的な神の憐れみと、神の憐れみの反照としての隣人愛を語っている、と私は考えている。

サマリア人と呼ばれる人びとは、ヘブル人と移民の混血であり、ゲリシム山を神の住まいの聖域として崇める。新約聖書時代のユダヤ人にとってサマリア人は、異邦異教の民であったが、ユダヤ人とサマリア人は、多くの点で重複する部分がある¹⁹。

「サマリアの女との問答」の次の箇所注目しよう。

「女は言った、「主よ、お見受けしたところ、あなた預言者です。わたしたちの先祖はこの山で礼拝しましたが、あなた方は、礼拝すべき場所はエルサレムにあると言っています」。イエスは彼女に仰せになった、「婦人よ、私を信じなさい。この山でもなく、エルサレムでもない所で、あなた方が御父を礼拝する時が来る。……しかし、まことの礼拝をす

とおりである」（口語訳聖書ローマ人への手紙15：9）。

「ほむべきかな、わたしたちの主イエス・キリストの父なる神、あわれみ深き父、慰めに満ちたる神」（口語訳聖書コリント人への第二の手紙1：3）。「しかるに、あわれみに富む神は、わたしたちを愛して下さったその大きな愛をもって……」（口語訳聖書エペソ人への手紙2：4）。「互に情深く、あわれみ深い者となり、神がキリストにあってあなたがたをゆるして下さったように、あなたがたも互にゆるし合いなさい」（口語訳聖書エペソ人への手紙4：32）。「そこで、あなたがたに、キリストによる勧め、愛の励まし、御霊の交わり、熱愛とあわれみとが、いくらかでもあるなら……」（口語訳聖書ペテロへの第一の手紙2：1）。

「だから、あなたがたは、神に選ばれた者、聖なる、愛されている者であるから、あわれみの心、慈愛、謙そん、柔和、寛容を身に着けなさい」（口語訳聖書コロサイ人への手紙3：12）。「信仰によるわたしの真実な子テモテへ。父なる神とわたしたちの主イエス・キリストから、恵みとあわれみと平安とが、あなたにあるように」（口語訳聖書テモテへの第一の手紙1：2）。「わたしは以前には、神をそしめる者、迫害する者、不遜な者であった。しかしわたしは、これらの事を、信仰がなかったとき、無知なためにしたのだから、あわれみをこうむったのである」（口語訳聖書テモテへの第一の手紙1：13）。「しかし、わたしがあわれみをこうむったのは、キリスト・イエスが、まずわたしに対して限りない寛容を示し、そして、わたしが今後、彼を信じて永遠のいのちを受ける者の模範となるためである」（口語訳聖書テモテへの第一の手紙1：16）。「わたしたちの行った義のわざによってではなく、ただ神のあわれみによって、再生の洗いを受け、聖霊により新たにされて、わたしたちは救われたのである」（口語訳聖書テトスへの手紙3：5）。「あわれみを行わなかった者に対しては、仮借のないさばきが下される。あわれみは、さばきにうち勝つ」（口語訳聖書ヤコブの手紙2：13）。「しかし上からの知恵は、第一に清く、次に平和、寛容、温順であり、あわれみと良い実とに満ち、かたより見ず、偽りが無い」（口語訳聖書ヤコブの手紙3：17）。「忍び抜いた人たちはさいわいであると、わたしたちは思う。あなたがたは、ヨブの忍耐のことを聞いている。また、主が彼になされたことの結末を見て、主がいかに慈愛とあわれみとに富んだかたであるかが、わかるはずである」（口語訳聖書ヤコブの手紙5：11）。「ほむべきかな、わたしたちの主イエス・キリストの父なる神。神は、その豊かなあわれみにより、イエス・キリストを死人の中からよみがえらせ、それにより、わたしたちを新たに生れさせて生ける望みをいだかせ……」（口語訳聖書ペテロの手紙1：3）。「あなたがたは、以前は神の民でなかったが、いまは神の民であり、以前は、あわれみを受けたことのない者であったが、いまは、あわれみを受けた者となっている」（口語訳聖書ペテロの手紙2：10）。「最後に言う。あなたがたは皆、心をひとつにし、同情し合い、兄弟愛をもち、あわれみ深くあり、謙虚でありなさい」（口語訳聖書ペテロの手紙3：8）。「世の富を持っていながら、兄弟が困っているのを見て、あわれみの心を閉じる者には、どうして神の愛が、彼のうちにあろうか」（口語訳聖書ヨハネの第一の手紙3：17）。「父なる神および父の御子イエス・キリストから、恵みとあわれみと平安とが、真実と愛のうちにあって、わたしたちと共にあるように」（口語訳聖書ヨハネの第二の手紙3）。「あわれみと平安と愛とが、あなたがたに豊かに加わるように」（口語訳聖書ユダの手紙2）。「神の愛の中に自らを保ち、永遠のいのちを目あてとして、わたしたちの主イエス・キリストのあわれみを持ち望みなさい」（口語訳聖書ユダの手紙21）。「疑いをいただく人々があれば、彼らをあわれみ……」（口語訳聖書ユダの手紙22）。「火の中から引き出して救ってやりなさい。また、そのほかの人たちを、おそれの心をもってあわれみなさい。しかし、肉に汚れた者に対しては、その下着さえも忌みきらいなさい」（口語訳聖書ユダの手紙23）。

19 p.9-25, 36-46 in *The Samaritans - a Profile-*, by Reinhard Pummer, William B. Publishing Company, Grand Rapids, Grand Rapids, Michigan/ Cambridge, 2016.

る者たちが霊と真理において御父を礼拝するときが来る。今がその時である。御父は、このように礼拝する者たちを求めておられるからである」(フランシスコ会訳聖書ヨハネによる福音書4:21～23)。

この箇所の中かで、イエスは、信仰が場所や儀礼など心理的-社会的意味位相には依らないことを、示唆している。人間は、神そのものではないが、神の霊の宿りなのである。人間に神は住まうのであり、ひとりひとりが神の宮なのである²⁰。

また、「善いサマリア人」(フランシスコ会訳聖書ルカによる福音書10:25～37)の次の箇所にも注目しよう。

「一人の律法の専門家が立ち上がり、イエスを試みようとして尋ねた、「先生、どうすれば、永遠の命を得ることが出来ますか」。そこで、イエスは仰せになった、「律法には何と書いてあるか。あなたはどうか読んでいるのか」。すると、彼は答えた、「『心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛せよ²¹。また、隣人をあなた自身のように愛せよ²²』とあります」。イエスは仰せになった、「あなたの答えは正しい。それを実行しなさい。そうすれば、生きるであろう」。すると、彼は自分を正当化しようとして、イエスに「私の隣人とは誰ですか」と言った。……「さてあなたは、この三人のうち、強盗に襲われた人に対して、隣人となったのは、誰だと思うか」。律法の専門家が、「憐れみを施した人(旅の途上にありながら、強盗に襲われた人を介抱したサマリア人)です」と言うと、イエスは仰せになった、「では、行って、あなたも同じようにしなさい」(フランシスコ会訳聖書ルカによる福音書10:25～29, 36～37)。

この箇所の中かで、イエスは、神の眼に適う者とは、神の憐れみとその反照としての隣人愛を知識として知っている者ではなくて、業(わざ)として実践して行為する者である、と言い、サマリア人が異邦異教の民であるかどうかは問題ではなくて、誰であれ、業として実践する者が神の眼に適うのであって、ユダヤ教徒であっても、実践しない者は、神の眼に適わないことを示唆している。その実践が如何に困難であり、不条理に満ちて狂気に思えようとも、また、たとえ絶望の淵に沈もうと、憐れみが無意味になることは断じてないことを、イエスはキリストとして人々に示して、実際に、死して後、肉体を伴って復活するのである。憐れみとは、人生そのものであり、苦悩や苦難に陥り絶望の果てに、希望の曙光が甦ってくることを、これを何度も何度も繰り返し、そのつど神に答え、そのつど隣人に憐れみを分け与えながら、生かされていくことにほかならないのである。

20 「あなたがたは神の宮であって、神の御霊が自分のうちに宿っていることを知らないのか」(口語訳聖書コリント人への第一の手紙3:16)。「もし人が、神の宮を破壊するならば、神はその人を滅ぼすであろう。なぜなら、神の宮は聖なるものであり、そして、あなたがたはその宮なのだからである」(口語訳聖書コリント人への第一の手紙3:17)。「神の宮と偶像となんの一致があるか。わたしたちは、生ける神の宮である。神がこう仰せになっている、「わたしは彼らの間に住み、かつ出入りをするであろう。そして、わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となるであろう」(口語訳聖書コリント人への第二の手紙6:16)。

21 申命記6:5。

22 レビ記19:18。

9. 死と復活の威力の呪術性

神の憐れみは、死と復活の威力を持った呪術性を伴っている。死の威力というのは、エリコ襲撃の helem やヨブの苦難の考察をとおして明らかになったように、神の狂気は生命を奪うことさえ是とする力であり、復活の威力というのは、イエス＝キリストの十字架上の死とその後の肉体を伴った復活によって裏打ちされているように、絶望を希望へと反転させる力である。

ヨブ記のなかでヨブの苦悩の意義が明らかにされていない訳は、Satan がなぜ存在するのかという疑問に対する明瞭な回答がないからである。そもそも、なぜ一体神が、旧約聖書では人間に敵対し新約聖書では神に敵対する Satan の存在と働きを認めるのか、むしろ、なぜ神は Satan を一掃しないのか、なぜ Satan は出現したのかといった、素樸ではあるが抜本的疑問に対して、明瞭な回答がなされていないのである。こうした疑問に対する回答は、おそらく、神の奥義を露わにするゆえに、忌避されているのであろう。そもそも、ヨブ記では Satan は神によって排除されないばかりか、むしろ神の使いの一員なのである。しかしながら、新約聖書では決然と、Satan は、死と復活の威力によって排除されるのである。

「しかし、このたぐいは、祈と断食とによらなければ、追い出すことはできない」(口語訳聖書マタイによる福音書 17:21)。「信じる者には、このようなしるしが伴う。すなわち、彼らはわたしの名で悪霊を追い出し、新しい言葉を語り……」(口語訳聖書マルコによる福音書 16:17)。「それからイエスは十二弟子を呼び集めて、彼らにすべての悪霊を制し、病気をいやす力と権威とをお授けになった」(ルカによる福音書 9:1)。「七十二人が喜んで帰ってきて言った、「主よ、あなたの名によっていたしますと、悪霊までがわたしたちに服従します」」(口語訳聖書ルカによる福音書 10:17)。「神は、パウロの手によって、異常な力あるわざを次々になされた。たとえば、人々が、彼の身につけている手ぬぐいや前掛けを取って病人にあてると、その病気が除かれ、悪霊が出て行くのであった」(口語訳聖書使徒行伝 19:11～12)。

死と復活の威力をもつイエス＝キリストの名前を声に出して唱えて祈ることによって、要するに、死と復活の威力をもつイエス＝キリストの言葉の呪術性をとおして、Satan は排除されるのである。

このように、当該の宗教や当該の宗教性をそもそも存立させている呪術性や霊性抜きにしては、人の集まりとしての組織体や教団は、存続しないはずではないのか。だが、そうした霊性そのものは、容易に見たり聞いたり触れたりできるものではなく、それゆえに、霊性のもとに人々が集まり、同質の霊性を維持継承し、発展させていくのは至難の業であり、つねに混乱と分裂を孕んでいる。こうした混乱と分裂を避けるために、霊性を仮設的

に、合理的知性という眼に写し出させて、人々が霊性をあたかも共有できるように考案されたものが、教義および教義学であろう。しかし、霊性を帯びず信心や信仰をもたないままで、教義を理解するということはそれこそ、不条理というものではないか、と私は思う。けれども既存既成の宗教は、時代を重ねて社会や国家のなかで一定の地位を得て、倫理的-文化的位相において一定の基盤を担うようになると、霊性を保持保全することは表向きの建前ばかりとなつて、実際には、強圧的-強権的に、組織体はその保全のために認可するかぎりの教義の枠組みに押し込むことを以てして、信心や信仰の形成や育成と考えることが当然のこととなつてしまった傾向の存在は否めず、とりわけ、そうした傾向が顕著に見られるのが、キリスト教ではないだろうか。

10. マリア=シンマ

マリア=シンマ Maria Simma (1915-2004) は、オーストリアのフォールベルク Vorarlberg 州ブルデンツ Bludenz 郡ゾンターク村 Sonntag²³ に、小作農であった敬虔なカトリック教徒の両親のもと 8 人兄弟の 2 番目の子どもとして生まれた。7 歳頃修道女になる召命を受けたが、身体が弱く果たせず、農業や家事手伝いをして終生未婚のままゾンターク村で、過ごした²⁴。晩年には、古い伝統的家屋であった自宅が全焼したが、周囲の援助を得て、再建された。また、晩年に、聖母マリアから召命を受けて、ゾンターク村に聖母マリアの足跡を祈念する小堂を、内外の信徒の支援を得て、建立している²⁵ (マリア=シンマが受けた召命に依ると、かつて聖母マリアは、イエス=キリストの昇天後、迫害をおそれて、エフェソスのブルブル山中に使徒ヨハネとともにのがれ、そこの住居で終焉を迎えるのだが²⁶、エフェソスへの途上、ゾンターク村に立ち寄っていた)。マリア=シンマは、1940年25歳の頃から未浄化の死霊が出現して、助けを求める体験を持ち始めて、終生この体験は続き、しだいに国内国外に知れ渡るようになった。

日常的に死霊は、彼女を訪れて、死霊の相談に耳を傾け、死後の世界について子細に聞き、ときには天使や悪魔悪霊も彼女の眼前に出現していた。マリア=シンマの場合、死霊などが彼女の心身に乗り移るといった憑依現象ではなくて、そうした霊が彼女の眼前に出現したり、物音がしたり急に火災が起こったりなどの物理現象が主であった。また、霊視をおこなったり、幻視を体験したりすることもあった。マリア=シンマは、敬虔なカトリック教徒であり、その信仰の正当性については、教区神父が語っている。信仰の敬虔さの一

23 オーストリア ゾンターク村 カトリック教会の近くにマリア=シンマの自宅があった。

24 シスター・エマヌエル著、中尾純子訳、いつくしみセンター編『〈新版〉煉獄にいる靈魂の驚くべき秘訣』、いつくしみセンター、新版 (2018 年刊行) のうち、3~4 頁。

25 マリア=シンマの召命によって建立された聖母マリアの小堂。

26 聖母マリア終焉の家。カトリック修道女で幻視者であったアンネ=カテリーネ=エンメリッヒ Anne Catherine Emmerich (1774-1824) の幻視にしたがって、フランス人神父ジュリアン=ギユートが、1881 年に発掘調査して発見した。1896 年教皇レオ 8 世が訪れ、1951 年ピウス 7 世が、聖母マリア終焉の住まいとして聖地であることを宣言した。教皇ヨハネ 23 世は恒久に聖地であることを宣言し、1967 年パウロ 6 世が、1979 年ヨハネ=パウロ 2 世が、2006 年ベネディクト 6 世が、この地を公式に訪問している。

端として、ほぼ毎週、金曜日から日曜日の早朝にかけて、イエス＝キリストの受難を追体験するものと思われる精神的苦痛を味わっていた²⁷。彼女の宗教観は大変興味深く、その信仰の敬虔さや正当性にもかかわらず他宗教に対して寛容であり、彼女の住む地域のなかで聖人はいるか、の質問に対して、或る一人の女性イスラム教徒がもっとも神に近い、と述べている。カトリック教会のミサ儀礼や聖職者の営みに対して、また、現代世俗文化に対しては、苛酷な批判をおこなっている。ミサ儀礼については、御聖体であるホスチアを手づかみすることの神への無礼さに、聖職者の営みについては、例えば牧会をおろそかにして信徒に慈愛を注がず、聖職者の位階や名誉に奔走することに、現代世俗文化については、若者世代のなかで神聖な意識が失われつつあることに、とりわけ批判をおこなっている。地獄や煉獄についても、カトリック信徒といえども、大半の人々が地獄や煉獄に落ちて、天に昇っていけないでいると語っている。

こうしたマリア＝シンマの信仰体験と証言は、キリスト教が本来有していたはずの呪術的靈性と同時に、キリスト教教界がそうした呪術的靈性から如何に離反してしまっているかを、示しているように思われてならない。

主な参考文献

1. *Meine Erlebnisse mit Armen Seelen* (未浄化の死霊をめぐる体験), von Maria Simma, Christiana-Verlag, Stein am Rhein, 1. Auflage, 1968 (6. Auflage 1970).
本書は、マリア＝シンマの神秘体験、とりわけ、die armen Seelen/the poor spirits (未浄化の死霊/天界に昇っていない死者の靈魂)との対話をとおして未浄化の死霊を救済する営みの全貌を、要領よく概括している。また、刊行者であり編者であるアーノルド＝ギレット Arnold Guillet が、カトリック教義との関係において、マリア＝シンマの体験の正当性を付記するとともに、教区司祭アルフォンス＝マート Alfons Mat によるマリア＝シンマについて報告が付記されている。
2. *The Amazing Secret of the Souls in Purgatory, an Interview with Maria Simma*, by Sister Emmanuel of Medjugorje, Queenship publishing company, Sant Barbara, 1977
(シスター・エマヌエル著、中尾純子訳、いつくしみセンター編『〈新版〉煉獄にいる靈魂の驚くべき秘訣』、いつくしみセンター刊行、初版(2016年刊行)、新版(2018年刊行))。本書は、*Meine Erlebnisse mit Armen Seelen* や “Get us out of here!!”- *Maria Simma responds to this call from the Poor Souls in Purgatory* と比べると、きわめてコンパクトなものであり、小冊子である。内容は、未浄化の死霊についての体験をエマニュエル修道女がマリア＝シンマにインタビューしたものであり、他書と重なる部分が多い。
3. “Get us out of here!!”- *Maria Simma responds to this call from the Poor Souls in Purgatory* (「ここから出してくれ! -煉獄にいる未浄化の死霊のこうした叫びに、マリア＝シンマは応答する」) - *Maria Simma speaks with Nicky Eltz, authorized by Maria Simma*-, by Maria Simma, interviewed by Nicky Eltz, The Medjugorje Web, DeKalb, the first printing 2002 (eleventh printing 2015)。本書は、340頁にわたって最も包括的に記述されたテキストであり、本発表も主として本書に依拠している。マリア＝シンマの生涯や体験および信仰内容についての記述のみならず、こうした神秘体験についてさらに参照すべき文献や、教義との関連、死者救済のための祈祷文など、

27 こうしたイエス＝キリストの受難を追体験する事例として他に、聖痕者 stigmatist としても知られたドイツ人女性カトリック信徒 Therese Neumann (1898-1962) が知られている。

学ぶべきことの多いテキストである。

11. 日本の心霊現象

低俗なスピリチュアリズムであるとか、たんなる部数稼ぎの創作と捏造の産物であるとかといった判断が偏見にすぎない、と気づかされるほどに望外に参考になるのは、「じっさいにあった怖い話」大都社刊行、「あなたが体験した怖い話」文化社刊行、「HONKOWA—一本当にあった怖い話—」朝日新聞出版刊行、「怪と幽」株式会社 KADOKAWA 刊行などの、恐怖心霊体験をアツかった雑誌類である。「怪と幽」以外は、マンガが主体であるが、大半は一般読者や霊能者の体験事例をコンパクトにまとめたものであり、恐怖を煽るというよりも、怒り・憎しみ・恨みといったマイナス感情の破滅力や忘恩・暴利・強欲・傲慢を、戒める内容となっていて、倫理的なものが多い。また、既存既成の宗教にはあまりこだわりがないものが多いように思うが、民俗信仰や伝承・神道・仏教などの伝承や教えや儀礼が断片的に取り上げられており、悪霊や悪鬼・因果応報・前世や来世・地獄や煉獄・動物霊（龍・蛇・狐など）や木霊といった自然霊・堕ちた神（悪神／禍津（まがつ）／魔神（まがみ）／オトロシ）・龍道や瘴気・風水といった題材が多く見られる。こうした雑誌類を通読してみると、読者は、たんなる怖いもの見たさというよりも、不条理で困難な人生を生き抜くための、或る種のカタルシスや知恵を真剣に求めていることが想像される。

著名な作家やルポライターのなかにも、かなり濃縮な心霊体験を記述している者がおり、例えば、佐藤愛子著『私の遺言』新潮文庫（2005年刊行）は、佐藤家を襲った20年以上にわたる深刻な心霊現象と様々な霊能者らによる解決の道程が記述されている。杉山響子著『物の怪と龍神さんが教えてくれた大事なこと』は、佐藤家に起こった心霊現象が娘の立場から記述され補強されている。同じく佐藤愛子著『冥土のお客』青志社（2018年刊行）は、『私の遺言』記述以降の心霊体験の叙述である。奥野修司著『魂でもいいから、そばにいて—3・11後の霊体験を聞く—』新潮社（2017年刊行）は、東日本大震災後から起こり続けた心霊現象、とりわけ、亡くなった家族があらわれる遺族らとのインタビューであり、特定の宗教色はほとんどないし、むしろ遺族らの大半は無宗教である。同じく奥野修司著『死者の告白—30人に憑依された女性の記録—』講談社（2021年刊行）は、看護師高村英のすさまじい憑依体験と、宮城県栗原市の曹洞宗通大寺の金田諦應住職がおこなった浄霊について、2人にインタビューしたものである。興味深いのは、高村英が同時に数人の死霊に憑依されるばかりか、そのなかに、犬などの動物の死霊さえ含まれていることがあり、動物の死霊も同時に浄霊されていることである²⁸。また、童話作家として著名な松谷みよ子著『あの世からのことづて—私の遠野物語—』筑摩書房（1984年

28 キリスト教正教でも、死後、動物の霊魂が救済されることを説いている書物がある。以下参照。 *Animals and Man: A State of Blessedness*, by Joanne Stefanatos, Doctor of Veterinary Medicine, Light and Life Publishing Company, Minneapolis, 1992.

刊行)と同上著『異界からのサイン』筑摩書房(2004年刊行)は、明治・大正・昭和をつらぬいて、死霊についての実体験を全国各地から収集したものである。

これらの雑誌や本に通底しているのは、死霊の存在について感覚的に自明なこととして受け止めている点であり、既存既成の宗教教義や自説一辺倒の独断的主張があまり見られないことである。心霊現象に遭遇する人々の精神的-宗教的リアリティは、心理的-社会的リアリティとしての既存既成の、教科書から学び知るような宗教のイメージとは乖離していると云える。これらの心霊体験の多くは、何らかの形で、仏教・神道・民俗伝承の背景を世界観として帯びており、そうした世界観についての執拗な猜疑心というのはほとんど見られない。これらのなかで、キリスト教に触れたものはごくわずかしなのであるが、聖母マリアや大天使の微笑み(慈愛)、キリスト教聖職者とキリスト教を背景としない霊能者の共働による浄霊儀礼、カトリック聖職者の審神(さにわ)、といった肯定的側面と、イタリアなど海外のカトリック修道僧などによる他宗教に対する頑迷な排他性や優越意識、といった否定的側面が、取り上げられている。

12. マリア=シンマの個別事例

“Get us out of here!!”- *Maria Simma responds to this call from the Poor Souls in Purgatory* では、マリア=シンマの心霊体験は、Purgatory(煉獄)・Heaven(天国)・Angels(天使)・Saints(諸聖人)・Bishops & Pope(司教・法王)・Priests & Sisters(司祭・修道女)・Other Religions・limbo(リンボ/煉獄の辺境地)・the Occult(オカルト)・Hell & Satan(地獄とサタン/悪魔)・Funerals & Graves(埋葬と墓)・Marian Apparitions(聖母マリア出現)などの項目に分けて編集され報告されている。また、これらを補足する宗教的倫理観や儀礼の在り方および日々の処し方などについては、Prayer & Fasting(祈祷と断食)・Church Teaching(教会説教) & Bible(教会の教えと聖書)・Sacramentals(儀礼)・Confession(告解)・Death(死)・Work and Money(仕事と金銭)・the Rosary(ロザリオの祈り)などがある。

マリア=シンマは、死霊や天使ならびに悪魔悪霊の出現の折々をとおして、上記のような内容について知見を得ている。

諸聖人

未浄化の死霊の守護聖人は、トレンティノの聖ニコラスである。また、聖ヨセフは、煉獄に魂が堕ちないように、大きな働きをしている。聖人たちの未浄化の死霊の救済の祈りは、大きな力がある。聖人の特質である謙虚さや服従は、現世では目立たず、誰が聖人であるかは分かりにくい。ピオ神父、ヨハネ=パウロ1世、マキシミアン=コルベ神父は、聖人である。誰であっても、聖人になる可能性と機会は神の御前において、公平にあ

る。聖人は、神や神の慈愛を侮蔑する行為に対しては、怒る。聖人であっても、怒るのである。どれほど困難なことであろうとも、あらゆる人を愛し、ゆるし、神や人のために善きことをおこなうのが聖人である²⁹。

他宗教

ユダヤ教徒であれ、イスラム教徒であれ、良心的な行いをしている人々のなかには、聖人がいる。キリスト教以外にも、多くの聖人がいる。かつて、或る幻視者が聖母マリアに、自分の街のなかで最も聖なる人は誰かと尋ねたら、聖母マリアは、ひとりのイスラム教徒の女性である、と答えた。カトリック教徒が最も天国に近いのであるが、正教徒やプロテスタント信徒であっても、ロザリオの祈りをおこなう者がいるし、たとえ、キリスト教の儀礼をまったく知らない者であっても、神に認められる者は多数いる。問題は、形ではなくて、真心である。また、生前キリスト教徒ではなかった未浄化の死霊が、イエス＝キリストを主であると告白するのを、聞いたことがある³⁰。

煉獄

煉獄 (purgatory) は、天国でイエス＝キリストにまみえる以前に、身を清めて罪を償うためにあらゆる霊魂が経験する状況や状態のことであり、実際に場所として実在する。煉獄は、三段階構成である。最下層は、地獄 (Hell) に接しており、最上層は天国に接している。長年にわたって人に意地悪をし続けたような者は、最下層に堕ちる。神の許しのあつた未浄化の死霊は、地上に助けを求めることができる。未浄化霊同士の交流は、ほとんどない³¹。

地獄とサタン

地獄やサタン (ルチファー) は、実在する。サタンは度々マリア＝シンマを惑わすためやって来た。神父や女性修道院長の姿のときもあった。現代社会においては、キリスト教界・法曹界・医療・学界・報道機関・芸術分野などあらゆるところ、とりわけ金融界にサタンがいる。サタンは、心の温かさや罪の告解、黙想を嫌う。サタンの活動は、現在かつてなかったほど強力である。背信・殺人・欲望・冷酷・祈りの欠如など、まさにサタンの時代である³²。

29 p.59-61 in "Get us out of here!!"- Maria Simma responds to this call from the Poor Souls in Purgatory.

30 p.96-99 in "Get us out of here!!"- Maria Simma responds to this call from the Poor Souls in Purgatory.

31 p.7-12 in "Get us out of here!!"- Maria Simma responds to this call from the Poor Souls in Purgatory.

32 p.117-129 in "Get us out of here!!"- Maria Simma responds to this call from the Poor Souls in Purgatory.

天国

煉獄の死霊が天国へと昇っていくことが多い日があり、それはクリスマス・受難の聖金曜日・イエス＝キリストの昇天日・万聖節である。現世に生きる私たちが気をつけるべきことは、謙虚 humble であることである。天国には様々な階層があるが、すべての者が歓喜のうちにいる。現世においてキリスト教徒ではなかった者であっても、多くの者が昇天している。大事なのは、真心の慈愛や慈悲を以て、日常生活を過ごしているかどうかである。天国は、光栄ある光・歓喜・神への賛歌に満ちている³³。

祈祷と断食

祈祷は、神への最も近い道であり、自分自身の日常のなかで学んで行くべきものである。断食は、祈祷にとっての最大の助け手である。

13. まとめ

マリア＝シンマの神秘体験事例は、既存のキリスト教教義と比べて、他宗教に対して寛容であるとともに、死者の霊魂や死後の世界の特徴について、日本の事例と類似するものが少なくない。呪術的霊性には、誰もが実感しやすいような、或る種の普遍性が存在しているように思われる。また、既存既成の宗教や神を超えて、慈愛や慈悲の心や謙虚さそのものを重要視するのも、特徴的であるが、新約聖書の「サマリア人のたとえ」は、まさにそうしたものであり、呪術的霊性を示唆している。

キーワード

憐れみ、心霊現象、呪術性、霊性、キリスト教

33 p.40-43 in "Get us out of here!!" - Maria Simma responds to this call from the Poor Souls in Purgatory.